台大日本語文研究第 23 期
2012 年 6 月，頁 215-242
2012-03-29 收稿，2011-06-22 通過刊登

台灣高中生日語學習動機與學習態度之研究
——以高中選修日語學生調查為例——

盧錦姬*

摘要

目前在台灣，每年都有很多學生在高中開始學習日語，且隨著學習人數的增加，其學習動機、學習態度也變得多樣化。本研究的目的主要是探討選修高中第二外語日語的學生，其學習動機和學習態度，及其對日語學習之影響。並比較因性別、年級、學校區域之不同，其學習動機、學習態度是否有顯著的差異。

根據調查統計分析，大致已獲得初步具體的結果：

一、台灣高中生日語學習動機可分爲「對日語學習之興趣」、「交流志向」、「對大衆文化之關心」、「利益志向」等四種，且屬於統合動機之「交流志向」和「對大衆文化之關心」的學習動機較強（兩因子皆在平均值以上）。

二、闡明了因性別、年級、學校區域之不同，其學習動機、學習態度皆有顯著的差異。

由以上的調查結果，可以瞭解因學習者屬性之不同，教師有必要採取因應的對策。本研究結果可以提供高中日語教師在教學及指導學生時之參考。

關鍵詞：高中第二外語、日語學習、學習動機、學習態度

* 靜宜大學日本語文學系副教授

The Study of the Motivation and Learning Attitude of Learning Japanese Second Language at Elective Course of High School Students

Lu, Jin-ji*

Abstract

Now in Taiwan, every year, many students start learning Japanese at high school. And as the number increases, their learning motivation and attitude are becoming variable. The main purpose of this study was to explore taking Japanese as a second foreign language in high school students, their motivation and learning attitude, and its influence on Japanese learning. To evaluate if there is a significant difference at their motivation, and learning attitude, by comparison with gender, grade, and the school differs from a region. Based on the statistics analysis of investigation, generally, we have get preliminary results: 1 Japanese learning motivation of Taiwan high school students can be divided into " Japanese learning of interest", and "AC ambition", and " mass culture of concern", and "interests ambition", four species, and belonging to Commission-in motivation of "AC ambition" and " mass culture of concern" of learning motivation were strong (two factor are above average value). 2 Set out by gender, grade, school differs from a region, there are significant differences between there motivation and learning attitude. From the above findings to understand the learning properties of different students, teachers need to take countermeasures.

Keywords: second language, Japanese learning, learning motivation, learning attitude

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, Providence University

台湾の高校生の日本語学習における動機づけと学習態度
—第二外国語として日本語を受講する学生を中心として—

盧錦姫*

要旨

近年台湾では、毎年多くの学生が高校で日本語を学習し始めている。学習者数の増加に伴い、その学習動機、学習態度も多様化しているものと思われる。本研究は高校において第二外国語として日本語を履修する学生の学習動機の実態及び学習態度を把握し、また、それが日本語学習にどのような影響を及ぼしているかについて解明することを目的とする。さらに、性別、学級、地域による学習動機、学習態度の差異も探る。

研究結果は以下の通りである。

一、台湾の高校生の日本語学習の動機づけは「日本語学習への興味」、「交流志向」、「大衆文化への関心」、「実利志向」の 4 種類が掲げられること、また、「交流志向」と「大衆文化への関心」という統合的動機づけがより高いこと（両因子ともに平均値以上の得点を示した）が分かった。

二、性別、学級、地域の要素の違いにより、その動機づけ、学習態度、考え方にも明らかな違いが見られることが分かった。このことから、学習者の違いにより、教師は異なる対応が必要なことが示された。

今回得た基礎データは、教授法や教授活動を改善するための情報、及び高校生日本語学習者に指導をする時の情報として活用しようとするものである。

キーワード：高校第二外国語、日本語学習、動機づけ、学習態度

* 静宜大学日本語文学系副教授

台湾の高校生の日本語学習における動機づけと学習態度
—第二外国語として日本語を受講する学生を中心として—

盧錦姬

一、問題の所在と研究目的

（一）本稿の目的と問題提起

台湾の教育部は高校生の学習を多様化させ、世界への競争力を培い、学生に国際的経験を積ませ、視野を広げさせるために、1983 年第二外国語を正式に高等学校の選択科目課程に取り入れ、1994 年より、少数の高校で実験的に第二外国語カリキュラムを開設し始めた。2011 学年度第一学期高校第二外国語カリキュラムの開設状況調査結果を見ると、計 233 校、1585 クラス、54658 名の高校生が第二外国語を履修、そのうち日本語選択科目課程を開設したのは 230 校、1031 クラス、37988 名の学生が日本語を履修し、履修人数はほかの外国語に比べかなり多いことがわかる（教育部, 2011）。

日本交流協会は日本語教育の現状を把握するため、1994 年度から現在に至るまで 6 回の調査を実施した。2009 年度に実施された調査結果によると、台湾の高校、高等職業学校が開設する選択科目の中で、日本語を履修する人数が最も多く、特に高校での比率が高い。現在台湾の高校で履修できる第二外国語は計 7 ヶ国語で、その中で、日本語を選択する学生は過去 5 年の平均で、全体の 80.4%を占めた（交流協会, 2010）。ここからわかるように今後台湾の学校で日本語を第二外国語の選択科目とする学生の比率も高くなるはずである。

このように、毎年多くの学生が高校で日本語を学習し始めている。その学習者数の増加に伴い、学習動機、学習態度も多様化しているものと思われる。どのような理由から日本語を学び始めたのか、また、高校までの英語教育を通じて、日本語を学ぶことに対してどのような態度を形成しているのかを理解することは日本語のカリキュ

ラム作成や授業の充実のために必要なことである。

動機づけと目標言語に対する学習態度が第二言語学習に注ぐ努力の大きさを決め、ひいては学習成果に影響を与える（Ellis, 1997）。従って、教師としては多人数のクラスで学生の動機づけや学習態度を把握し、学生の学習状況を検討し、再考すべきことも重要なことと考えられる。

以上のことをふまえ、本研究は高校において第二外国語として日本語を履修する高校生の学習動機の実態及び学習態度を把握し、また、それが日本語学習にどのような影響を及ぼしているかについて解明する。さらに、性別、学級、地域の違いによる学習動機と学習態度の差異も探ってゆく。

（二）研究の目的

本研究の目的は以下の通りである。

1、因子分析によって、高校生の日本語学習の動機づけを抽出し、動機づけている要因を明らかにする。

2、動機づけと学習者の背景的情報（性別、学級、学校地域）との関連性を探求する。

3、高校生の日本語学習態度と評価に関する傾向にはどのようなものがあるかを考察する。

4、高校生の日本語学習態度および評価と学習者情報（性別、学級、地域）との関連性を探求する。

二、先行研究

（一）動機および動機づけの定義

動機あるいは動機づけは非常に複雑なことがらである。GardnerとLambert（1959）は、外国語学習の動機を「言語学習目標へ向けての学習者の態度である」と定義する。Dickinson（1995）は、動機は学習者が学習のためにどんな準備をし、学ぶためにどう努力しているかに関係していると述べている。速水（1998）は、動機づけとは、「人間の行動を一定方向へ向けていく潜在的エネルギーである」

と定義する。Dornyei（2001a）は、動機づけの意味を以下の3点に認めている：

1、決断の理由（why people decide to do something）

2、活動を継続する期間（how long they are willing to sustain the activity）

3、熱心さ（how hard they are going to pursue it）

本研究では、学習動機を「学習行動を選択するときの理由」（浅野, 2006）とする。

（二）学習動機に関する研究

Gardner &Lambert（1972）は、動機を統合的動機づけ（integrative motivation）と道具的動機づけ（instrumental motivation）に分けている。統合的動機づけとは、他の言語を話す人々の集団やその文化、言語に対して興味・関心を抱き、その中にとけ込みたいと考え、第二言語を学習する場合である。道具的動機づけとは、社会的地位を得る目的や、入学試験などの教育的な目的で、第二言語を学習しようとする場合である。

日本語学習動機の分析例として、これまでに、縫部ら（1995）は、外国語として日本語を学習しているニュージーランドの大学生を対象として日本語学習動機を調べた。習得度との相関が高い動機は日本理解、国際意識、学習への興味、統合的志向、誘発的志向、道具的志向と示した。成田（1998）は、タイの日本語専攻の大学生を対象として日本語学習動機を調べた。日本語学習成績と学習動機の関係を検討し､統合志向が高ければ成績が良いことが明らかになった。郭・大北（2001）は、シンガポール華人大学生の日本語学習動機に関する調査を行った。日本語の上達を促し学習の動機づけを高めるためには、日本人との接触や日本文化への理解の重要性を示唆している。磐村（2004）は、韓国人女子大学生を対象として日本語学習動機を調べた。大衆文化接触志向の高い学習者の成績がいいことを報告している。呉（2005）は、アメリカ中西部の日本語専攻の大学

生を対象に調査した。全体的に日本語の学習動機が強く、日本語学習に積極的な態度を持ち、「日本語が面白い」、「日本語文法の学習が大切だ」と思っている学生の割合も高くなっていると示された。

続いて、台湾における日本語学習者の動機づけの研究を見てみる。高等教育機関における日本語学習者の動機づけに関する量的な研究に楊（2004）、藤原（2005）、堀越（2006）、荒井（2006）、筆者（2009）、筆者（2011）、楊（2011）などがある。また、台湾の広範な日本語教育機関及び学習者を対象とした量的調査には日本交流協会（2010）がある。

楊（2004）は、台湾中部にある技術学院における学習者を対象に日本語学習動機についてアンケート調査を行った。その結果：「学習志向因子」、「現代日本憧れ因子」、「自己満足因子」、「交流志向因子」、「消極的因子」、「道具的因子」、「補償的因子」、「娯楽因子」と「仕事因子」の 9 因子が抽出された。しかし、被調査者の年齢層は 10 代から 40 代までと幅広く、個々の学習者の背景（年齢・学歴・社会経験）などによる異なる質的動機づけについては明らかにされていない。藤原（2005）は、1997 年と 2003 年の二回にわたって、アンケート調査を行った。日本語学習者に「なぜ日本語を勉強しているか」と聞いたところ、「日本や日本人、日本文化に興味がある」が最も大きな動機として挙げられ、前後二回の調査結果には大きな相違が見られないと述べている。堀越（2006）は、台湾北部・中部の大学 8 校の夜間コース（いわゆる「進修部」「在職班」「推広部」）で日本語を学ぶ 10 代から 60 代までを対象として調査を行った。日本文化の理解や大衆文化に対する興味がその動機因子の多くを占め、日本語を仕事に役立てたいという因子はその中で比較的小さいものであると報告している。荒井（2006）は、台湾中部にある大学の日本語学科の学生を対象に質問紙調査を行った。その結果：学習者全体の動機づけとして「日本文化の影響を受けて」、「日本語という言語そのものへの興味」、「日本文化に興味がある」に続き、「日本語でコミュニケーションができるようにするため」、「将来の就職のため」

などが見られた。筆者（2009）は、選択科目としての「日文」を受講している台湾中部にある大学及び技術学院の学生を対象に質問紙調査を行い、動機づけに関わる回答を求めた。因子分析の結果：「日本への関心因子」、「日本あこがれ因子」、「自己満足因子」、「就職利益因子」、「誘発的因子」の 5 因子を抽出することができた。ただ、この研究は回答数を集計するにとどまり、台湾の日本語主専攻学習者の動機づけを詳細に解明するには至っていない。また、筆者（2011）は、台湾中部にある大学の日本語専攻学生の日本語学習を事例として、彼らがどのような学習動機及び学習ストラテジーを持っているかを探った。これにより、台湾人日本語を専攻する学生の学習動機と使用する学習ストラテジーの傾向や学習者要因などとの関わりを明らかにすることができた。ただ、この研究は筆者が勤めている大学の日本語学科の特定教育環境における日本語学習者の学習動機と学習ストラテジーの使用傾向を分析するという実態調査とそれに関する小考察にとどまった。楊（2011）は、台湾の大学生を対象に質問紙調査を行い、因子分析と重回帰分析による分析を行った結果：動機づけは「実用性重視志向」、「日本関連志向」、「日本語学習への興味」、「交流志向」、「日本文化への関心」、「大衆文化への興味」、「外的評価重視志向」の 7 因子から構成されることを見出した。日本交流協会（2010）の広範な日本語教育機関の調査結果によると、高等教育段階では、「受験のため」、「将来の就職のため」など日本語を能力や資格の一つとして捉えている傾向が強いが、一方で「日本語によるコミュニケーション」、「国際理解・異文化理解」など「交流志向」も強い傾向があると報告している。

このように、海外及び台湾におけるこれまでの日本語学習の動機づけに関わる研究はほとんど高等教育機関に焦点を置く傾向にあった。学習習者の動機づけを考えるには、学習者の属性を考慮したうえで検討する必要性があると思われる。台湾の日本語学習者の動機づけの実態を把握するためには、高等教育機関の学習者だけではなく、中等教育機関の高校生についても検討する必要がある。

三、調査概要

（一）調査対象

調査対象とされた高校は、台湾の北部から南部、東部にわたる国立高校、私立高校を含む 37 校である。調査の対象は第二外国語として日本語を受講する高校生である。調査協力をもらった学校数は 37 校であり、実際に調査票を回収した学校数も 37 校である（回収率は 100%）。回収したものには、全項目の 1/3 以上記入がないものがあり、これらを除外した結果、有効回答数は 1072 名となった（有効回答率 95%）。

（二）調査時期

調査期間は 2011 年 11 月～12 月にかけて行なった。

（三）調査方法

調査方法は質問紙調査による。調査協力のできる高校へ調査用紙と郵送料を送付し、学生の回答したアンケートを回収した。

（四）調査項目

学習者の背景を把握するために①性別、②学校、③学級を尋ねた。調査に用いた調査項目は三つに分類される。一つ目の学習動機測定項目としては、Gardner and Lambert（1972）と筆者（2009）の学習動機に関するアンケート調査項目を参考にし、25 項目を作った。二つ目は日本語カリキュラムについての質問で、7 項目からなっている。三つ目は日本語学習態度と評価で、9 項目からなっている。本調査は台湾の高校日本語学習者を対象に実施したため、中国語の質問用紙を用いて質問した。

（五）回答方法

回答方法は各々の項目に対して、5＝よくあてはまる、4＝だいたいあてはまる、3＝どちらともいえない、2＝あまりあてはまらない、1＝まったくあてはまらない（Likert scale 尺度[1]）の 5 段階で回答させた。

[1] Likert の原著は 1932 年に発表されたが、簡潔で多目的に利用でき、かつ信頼性の高い尺度構成法である。原型では 5 件法（5 段階評価）がもちいられて

（六）調査票の信頼性

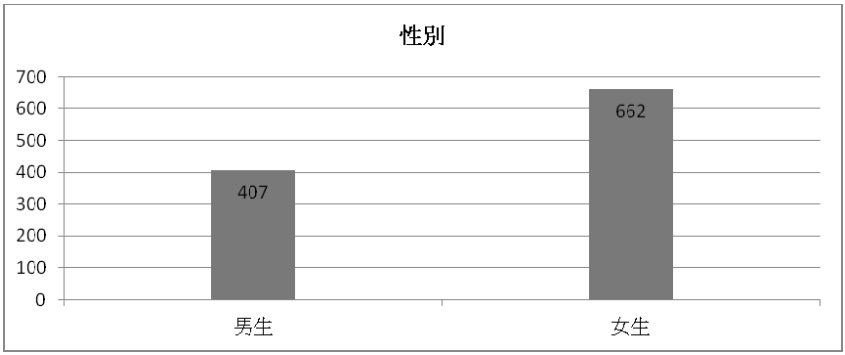
信頼性については、まず、調査項目の内部一貫性(信頼性）について、クロンバックアルファ（Cronbach's Coefficient Alpha）値を求めたところ、調査票の信頼性 Cronbach's Alpha 値（α）は 0.91 であった（通常 0.7 以上を基準とする）。そのため、本調査は高い信頼性を持っているということが分かる。

四、調査結果の分析と考察

（一）学習者の背景の情報

1、性別

表 1 性別

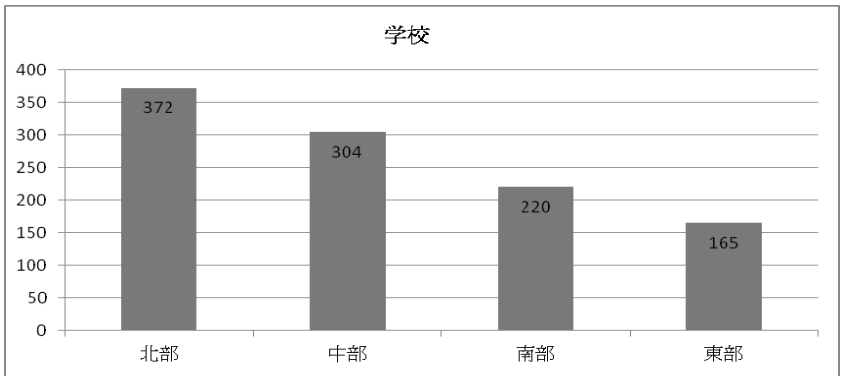


男性は 407 名（全体の 38%）、女性は 662 名（全体の 62%）である。

いる。各選択肢に数値を与えて点数化する（たとえば、「強く賛成する= 5」、「強く反対する=1」など）。

2、学校

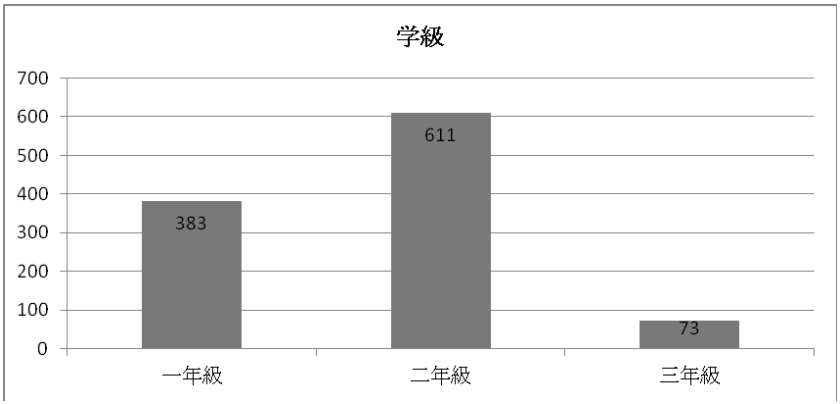
表 2　学校



北部の学生は 372 名（全体の 35%）、中部の学生は 304 名（全体の 29%）、南部の学生は 220 名（全体の 21%）、東部の学生は 165 名（全体の 16%）である。

3、学級

表 3 学級



一年生は 383 名（全体の 36%）、二年生は 611 名（全体の 57%）、三年生は 73 名（全体の 7%）である。

（二）日本語カリキュラムについての考え方

今回調査した日本語カリキュラムについて高校生の意見から得られた結果をまとめると、次の表 4 と表 5 のような傾向が見られることがわかる。

表 4　日本語カリキュラムについての考え方（1）

		賛成率
1 高校第二外国語日本語「初級課程」を受けるのは何年生が一番ふさわしいと思いますか。	一年生	83%
	二年生	16%
	三年生	1%
2 高校第二外国語日本語「進階課程」を受けるのは何年生が一番ふさわしいと思いますか。	一年生	17%
	二年生	71%
	三年生	11%
3 高校第二外国語日本語課程の生徒数は何人くらいがふさわしいと思いますか。	20 人以下	21%
	25 人以下	17%
	30 人以下	28%
	35 人以下	20%
	35 人以上	14%

表 4 によると、高校第二外国語日本語『初級課程』を受けるのは一年生が一番ふさわしいと思う人が圧倒的に多い。（賛成派率は 83%）。また、『進階課程』を受けるのは二年生が一番ふさわしいと思う人も 71%という高い賛成派率を示している。一クラスの学生人数は 30 人以下が一番ふさわしいと思う人が比較的多かった。

次の表 5 は日本語カリキュラムに関する高校生の考え方を 5〜1 の各回答割合（%）、賛成派率[2]（%）を記したものである。賛成派率の高い方から低い方へ、表の上から下へと配列した。すなわち、

[2] 「賛成派率」は「強く賛成」「賛成」と回答した者の割合を示す。

賛成寄りから反対寄りへと並んでいる。

表 5 日本語カリキュラムについての考え方（2）

質問項目	強く賛成←→強く反対（%）					賛成派率
	5	4	3	2	1	
7 高校第二外国語日本語課程の学習内容は学生の日常生活にあったものを主とするべきだ。	29	46	23	1	1	75
4 通常授業時間（月曜日から金曜日）に第二外国語日本語課程を設けるよう各高校に勧めるべきだ。	30	35	27	5	4	65
6 高校日本語課程を終えるとき、あなたの立てた目標に達することができる。	8	30	48	10	4	38
5 週末または日曜日に第二外国語日本語課程を設けるよう各高校に勧めるべきだ。	8	18	37	22	14	26

表 5 によると、「高校第二外国語日本語課程の学習内容は学生の日常生活にあったものを主とするべきだ。」については、高い賛成派率（75%）を示している。つまり、学生に日本語で日常生活を送れるような基礎的な能力を培わせることは台湾の高校日本語教育事情として重要であるということである。また、「通常授業時間（月曜日から金曜日）に第二外国語日本語課程を設ける。」と考えている学習者が比較的多かった。しかし、「日本語課程を終えるとき、立てた目標に達することができる。」については、38%の賛成派率を示している。つまり、6 割以上の学習者は立てた目標に達することができないと考えている。

（三）学習動機の分析

1、学習動機の全体的傾向

本研究の因子分析の方法はまず探索的因子分析（主因子法[3]）によって固有値 1 以上の基準で因子数を求め、主成分解・バリマックス回転[4]を行なったものである。4 因子解（寄与率は全分散の 51.20%）を最適解として採用した。各因子に含まれる項目は因子負荷量 0.40 以上のものである。抽出した項目の内容と因子負荷量を表 6 に示す。

表 6 学習動機の探索的因子分析(バリマックス回転後の因子負荷量)

項目内容	成分			
	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
2 日本語の学習を楽しんでいるから	0.810	0.227	0.307	
1 日本語が好きだから	0.734	0.299	0.351	
3 達成感があると思うから	0.721	0.198	0.293	0.126
25 できれば日本語を学び続けたい	0.687	0.365	0.257	0.141
23 おもしろいチャレンジだから	0.594	0.335	0.160	0.225
14 日本の友達と付き合いたいから	0.205	0.802	0.176	0.199
13 日本人と会話がしたいから	0.306	0.801	0.157	0.108
15 日本へ旅行したいから	0.277	0.696	0.193	
20 日本へ留学したいから	0.324	0.518	0.200	0.257
10 日本のファッションに興味があるから		0.467	0.220	0.144
9 日本文化に興味があるから	0.377	0.428	0.330	
6 日本の雑誌、漫画、新聞を読みたいから	0.229	0.219	0.832	

[3] 多数の項目間の相関行列に基づいて、項目間に潜在している因子の構造を見いだそうとする統計手法が因子分析である。主因子法は因子の抽出法の一つであり、抽出された因子が各変数に対してもつ重みのことを因子負荷量と呼ぶ。

[4] 因子の解釈を容易にするために、因子軸を回転させて解釈しやすい値を求める手続きをとること、最も一般的な回転方法は主成分解・バリマックス回転と言われるものである。

8 日本の小説と文学作品を読みたいから	0.329	0.259	0.629	0.144
7 日本の映画、テレビ、ドラマを見たいから	0.234	0.342	0.619	0.119
5 日本の歌を歌いたい、歌詞が分かりたいから	0.399	0.256	0.591	
4 インターネットを使うから	0.251		0.562	0.184
12 日本のゲームを遊びたい			0.454	0.155
22 友達に影響されたから				0.655
16 日本語でいい成績を取りたい	0.146	0.164	0.128	0.608
21 他人に期待されたから	-0.162			0.603
24 日本語能力試験に合格したい	0.364	0.227	0.157	0.584
17 日本語が学びやすいから	0.287	0.127	0.129	0.576
18 日本語よりもっとよい履修科目がないから			0.101	0.528
19 将来日本語学科に進学したい	0.448	0.201	0.208	0.449

以上の因子分析の結果から日本語の学習動機に四つの因子を抽出することができた。ただし、負荷量 0.40 未満の項目（日本の政治と経済に興味があるから）は削除した。

第一因子の項目は「日本語の学習を楽しんでいるから」、「日本語が好きだから」、「達成感があると思うから」、「できれば日本語を学び続けたい」、「おもしろいチャレンジだから」など、学習する内容に対する興味・関心に基づく動機項目である。この語学学習に対する興味とは、学習する内容よりむしろ、語学学習を行うこと自体への興味と捉えることができる。これを『日本語学習への興味』と命名した。

第二因子の項目は「日本の友達と付き合いたいから」、「日本人と会話がしたいから」、「日本へ旅行したいから」、「日本へ留学したいから」、「日本のファッションに興味があるから」、「日本

文化に興味があるから」など、交流の意思を表す項目からなるため、これを『交流志向』名づけた。

第三因子には「日本の雑誌、漫画、新聞を読みたいから」、「日本の小説と文学作品を読みたいから」、「日本の映画、テレビ、ドラマを見たいから」、「日本の歌を歌いたい、歌詞が分かりたいから」、「インターネットを使うから」、「日本のゲームを遊びたい」項目が入っており、日本の大衆文化と関連する項目からなるため、『大衆文化への関心』と名づけた。

第四因子の項目は「友達に影響されたから」、「日本語でいい成績を取りたい」、「他人に期待されたから」、「日本語能力試験に合格したい」、「日本語が学びやすいから」、「日本語よりもっとよい履修科目がないから」、「将来日本語学科に進学したい」など、日本語学習それ自体ではなく、日本語を学習する行動の成果を認めてもらいたい、あるいは、他人からの評価をもらいたいという意思をさす項目からなるため、これを『実利志向』名づけた。また、因子の信頼性を確認するため、因子ごとに信頼性 Cronbach's Alpha 値（α）係数を求めたところ、第一因子 α=0.91、第二因子 α=0.87、第三因子 α=0.85、第四因子 α=0.80、それぞれに高い一貫性が認められた。

2、学習動機因子の内訳

表 7 学習動機因子の内訳

因子	因子名	項目数	平均値	標準偏差	順位
第二因子	交流志向	6 項目 (9,10,13,14,15,20)	4.57	0.89	1
第三因子	大衆文化への関心	6 項目 (4,5,6,7,8,12)	4.14	1.00	2
第四因子	実利志向	7 項目 (16,17,18,19,21,22, 24)	3.75	0.95	3
第一因子	日本語学習への興味	5 項目(1,2,3,23,25)	3.74	0.83	4
平均値			4.11		

表 7 をみてみると、全項目（25）の平均値は 4.11 で、この平均値以上の得点を示した因子は 2 因子あり、「交流志向」が第一位を占めている（平均値 4.57)。第二位は「大衆文化への関心」である（平均値 4.14)。つまり、第二外国語として日本語を学習する高校生は「交流志向」と「大衆文化への関心」という統合的動機づけがより高いことが分かった。

（四）学習者の背景情報の違いによる四因子の比較

1、性別による学習動機の違い

男性と女性の持つ動機づけに違いが見られるかを検討するために、性別に t 検定を行なった。分析にあたって、動機づけの各因子それぞれの下位尺度に含まれる項目の単純加算平均値を算出し尺度得点として検定に用いた。その結果は表 8 のようにまとめられる。

表 8 性別による学習動機の違い

因子	因子名	男性		女性		平均差	P 値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
第一因子	日本語学習へ興味	3.61	0.92	3.82	0.75	-0.21	0.000***
第二因子	交流志向	4.32	0.97	4.73	0.81	-0.41	0.000***
第三因子	大衆文化への関心	4.22	1.07	4.09	0.97	0.13	0.060
第四因子	実利志向	3.69	1.08	3.80	0.84	-0.11	0.087

***p<.001

表 8 によると、第一因子の「日本語学習への興味」と第二因子の「交流志向」において、性別の違いによって平均値に有意な差が認められた。また、平均差はマイナスであり、つまり、男性は女性より低い傾向が見出された。このことから、女性の方が男性より「日

本語学習への興味」という語学学習への興味を持っていることがわかる。また、日本人と交流する「交流志向」も高いようにうかがえる。

2、学校地域による学習動機の違い

ここでは、学校地域による学習者の持つ学習動機を四つの地域、つまり、北部、中部、南部、東部四つのグループに分けて比較した。グループの学習動機の差異を見る目的で、四因子の学習動機に対して、ANOVA 分析によって分析すると、有意な差（顕著性 p<.001）が認められたのは、第一因子と第二因子と第三因子である。その中身を Scheffe 多重分析すると、表 9 のようにまとめられる。

表 9 学校地域による学習動機の違い

因子	因子名	北部		中部		南部		東部		P 値	地域の有意差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
第一因子	日本語学習への興味	3.51	0.93	3.92	0.73	3.84	0.71	3.83	0.78	0.000 ***	北<中 北<南 北<東
第二因子	交流志向	4.42	0.99	4.67	0.82	4.58	0.78	4.70	0.90	0.000 ***	北<中 北<東
第三因子	大衆文化への関心	4.00	1.11	4.26	0.93	4.06	0.94	4.33	0.89	0.000 ***	北<中 北<東
第四因子	実利志向	3.78	1.09	3.66	0.87	3.81	0.82	3.77	0.85	0.249	

***p<.001

第一因子：「日本語学習への興味」

表 9 の平均値をみてみると、中部グループが第一位を占めている。第二位は南部グループ、第三位は東部グループ、第四位は北部グル

ープである。また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、北部グループはほかの 3 グループ（中部、南部、東部）との間に有意な差があった。このことから、北部の高校生は第二外国語として日本語を学習するとき、「日本語学習への興味」という動機づけは中部、南部、東部の学生より低いことが明らかになった。

第二因子：「交流志向」

表 9 の平均値をみてみると、東部グループが第一位を占めている。第二位は中部グループ、第三位は南部グループ、第四位は北部グループである。また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、北部グループは中部と東部の両グループとの間に有意な差があった。このことから、北部の高校生は第二外国語として日本語を学習するとき、「交流志向」という動機づけが中部、東部の学生より低いことが明らかになった。

第三因子：「大衆文化への関心」

表 9 の平均値をみてみると、東部グループが第一位を占めている。第二位は中部グループ、第三位は南部グループ、第四位は北部グループである。また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、北部グループは中部と東部の両グループとの間に有意な差があった。このことから、北部の高校生は第二外国語として日本語を学習するとき、「大衆文化への関心」という動機づけが中部、東部の学生より低いことが明らかになった。

第四因子：「実利志向」

表 9 の平均値をみてみると、南部グループが第一位を占めている。第二位は北部グループ、第三位は東部グループ、第四位は中部グループである。また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、四グループとの間に有意な差は見られなかった。

3、学級による学習動機の違い

ここでは、学級による学習者の持つ学習動機を三つのグループ（一年生、二年生、三年生）に分けて比較した。ループの学習動機の差異を見る目的で、四因子の学習動機に対して、ANOVA 分析に

よって分析すると、四因子ともに有意な差（顕著性 p<.001）が認められた。その中身を Scheffe 多重分析すると、表 10 のようにまとめられる。

表 10 学級による学習動機の違い

因子	因子名	一年生		二年生		三年生		P 値	学級の有意差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
第一因子	日本語学習への興味	3.58	0.89	3.81	0.77	4.14	0.75	0.000 ***	一[5]<二[6]<三[7]
第二因子	交流志向	4.42	0.88	4.64	0.88	4.81	0.93	0.000 ***	一<二 一<三
第三因子	大衆文化への関心	3.98	1.06	4.20	0.95	4.53	1.00	0.000 ***	一<二<三
第四因子	実利志向	4.35	0.87	3.82	0.95	4.35	0.92	0.000 ***	一<二<三

***p<.001

表 10 の平均値をみてみると、第一因子：「日本語学習への興味」と第三因子：「大衆文化への関心」と第四因子：「実利志向」の三因子はともに三年生が第一位を占めている。第二位は二年生、第三位は一年生である。また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、三因子ともに一年生グループはほかの 2 グループ（二年生、三年生）との間に有意な差があった。また、二年生グループは三年生グループとの間に有意な差があった。このことから、高校一年生は第二外国

[5] 一：一年生
[6] 二：二年生
[7] 三：三年生

語として日本語を学習するとき、「日本語学習への興味」、「大衆文化への関心」、「実利志向」という動機づけが二年生と三年生より低いことが明らかになった。また、二年生も三年生より低い傾向がうかがえる。第二因子:「交流志向」についても、三年生が第一位を占めている。第二位は二年生、第三位は一年生である。また、Scheffe多重分析の結果をみてみると、一年生グループは三年生と二年生の両グループとの間に有意な差があった。このことから、高校一年生は第二外国語として日本語を学習するとき、「交流志向」という動機づけが三年生と二年生より低いことが明らかになった。

（五）日本語学習態度と評価[8]の分析

今回調査した日本語学習態度と評価の傾向について高校生の意見から得られた結果をまとめると、次のような傾向が見られる。本稿では5〜1の各回答割合（%）、賛成派率[9]（%）を記した。賛成派率の高い方から低い方へ表の上から下へと配列した。すなわち、賛成寄りから反対寄りへと並んでいる。

表11 日本語学習態度と評価の各回答割合（%）、賛成派率（%）

質問項目	強く賛成←→強く反対（%）					賛成派率
	5	4	3	2	1	
1 学生は自発的に日本語を勉強している。	20	35	36	6	3	55
6 日本語は大学入試試験の科目ではないけれど、まじめに勉強している。	18	37	35	7	3	55
9 学生に積極的に信用のある日本語検定試験を受けるよう勧	15	33	39	8	5	48

[8] 日本語学習成果の判断
[9] 「賛成派率」は「強く賛成」「賛成」と回答した者の割合を示す。

めるべきだ。						
3 学生は真剣に日本語のテストの準備をする。	15	32	42	8	4	47
5 学生はしっかり日本語の宿題やレポートをしている。	12	30	47	8	3	42
8 日本語関連の大学学部に推薦または申請入学するとき、高校の第二外国語日本語の成績を考慮すべきだ。	13	24	34	16	13	37
2 学生は日本語を勉強する際、自分から先生に指導を求める。	11	21	51	14	4	32
4 学生は日本語授業の際、自発的に質問する。	7	14	56	18	4	21
7 大学入学試験に日本語科目を増設するべきだ。	7	10	36	26	22	17

表 11 によると、日本語学習態度に関しては、「学生は自発的に日本語を勉強している。」と「日本語は大学入試試験の科目ではないけれど、まじめに勉強している。」両項目ともに 55%賛成派率を示している。つまり、半分以上の高校生が日本語は大学入学試験の試験科目ではないが、まじめに学習し試験の準備もするとした。一方、評価については、「大学入学試験に日本語科目を増設するべきだ。(賛成派率＝17%)」と「日本語関連の大学学部に推薦または申請入学するとき、高校の第二外国語の日本語の成績を考慮すべきだ。(賛成派率＝37%)」、両項目ともに賛成する学生の数は必ずしも多くなかった。この結果から、学生は試験からくるプレッシャーを増加させたくないと考えていると推測される。また学生は積極的に「日本語検定試験」を受けようとは思っておらず、さらに、「学生は日本語を勉強する際、自分から先生に指導を求める。(賛成派率＝32%)」と「学生は日本語授業の際、自発的に質問する。(賛成派率＝21%)」に対

しても、賛成する学生の数はあまり多くなかった。学生にとって自ら積極的に教師に接することは勇気がいる行為なので、教師からきっかけをつくってあげることが大切である。

（六）学習者の背景情報の違いによる学習態度と評価の比較

1、性別による学習態度と評価の違い

ここでは、男性と女性の持つ学習態度と評価に違いが見られるか否かを検討するために、男女別にに t 検定を行なった。分析にあたって、学習態度と評価のそれぞれの下位尺度に含まれる項目の単純加算平均値を算出し尺度得点として検定に用いた。その結果は表 12 のようにまとめられる。

表 12 性別による学習態度と評価の違い

	男		女		平均差	P 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
学習態度[10]	19.56	5.30	20.76	4.23	-1.2	0.0001***
評価[11]	8.81	3.16	9.18	2.54	-0.37	0.0455*

*p<.05, ***p<.001

表 12 によると、学習態度と評価は、男女によって平均値に有意な差が認められた。また、平均差はマイナスであり、つまり、男性は女性より低い傾向が見出された。このことから、女性の方が男性より「自発的に日本語を勉強している。」、「自分から先生に指導を求める。」、「真剣に日本語のテストの準備をする。」、「自発的に質問する。」、「しっかり日本語の宿題やレポートをしている。」、「日本語は大学入試試験の科目ではないけれど、まじめに勉強している。」などの学習態度を持っている。また、評価についても、女性の方が男性より「大学入学試験に日本語科目を増設するべきだ。」、「日本語関連

[10] 学習態度：項目 1,2,3,4,5,6 である。
[11] 評価：項目 7,8,9 である。

の大学学部に推薦または申請入学するとき、高校の第二外国語日本語の成績を考慮すべきだ。」、「学生に積極的に信用のある日本語検定試験を受けるよう勧めるべきだ。」の項目に対して積極的な態度を示していることがうかがえる。

2、学校地域による学習態度と評価の違い

ここでは、学校地域による学習者の持つ学習態度と評価を四つの地域、つまり、北部、中部、南部、東部四つのグループに分けて比較した。グループの学習態度と評価の差異を見る目的で、ANOVA 分析、Scheffe 多重分析を行なった。結果は表 13 のようにまとめられる。

表 13 学校地域による学習態度と評価の違い

	北部		中部		南部		東部		P 値	地域の有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
学習態度	19.41	5.34	21.23	4.38	20.65	4.02	20.15	4.35	0.000 ***	北<中 北<南
評価	8.38	3.17	9.34	2.57	9.26	2.30	9.71	2.54	0.000 ***	北<中 北<南 北<東

***p<.001

学習態度について

表 13 の平均値をみてみると、中部グループが第一位を占めている。第二位は南部グループ、第三位は東部グループ、第四位は北部グループである。また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、北部グループは中部と南部の両グループとの間に有意な差があった。つまり、北部の高校生は中部と南部の高校生より低いことが明らかになった。

評価について

表 13 の平均値をみてみると、東部グループが第一位を占めている。第二位は中部グループ、第三位は南部グループ、第四位は北部グループである。また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、北部グループはほかの 3 グループ（中部、南部、東部）との間に有意な差があった。このことから、北部の高校生は中部、南部、東部の学生より低いことが明らかになった。

3、学級による学習態度と評価の違い

ここでは、学級による学習者の持つ学習態度と評価を三つのグループ（一年生、二年生、三年生）に分けて比較した。グループの学習態度と評価の差異を見る目的で、ANOVA 分析、Scheffe 多重分析を行なった。結果は表 14 のようにまとめられる。

表 14 学級による学習態度と評価の違い

	一年生		二年生		三年生		P 値	学級の有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
学習態度	19.60	4.87	20.47	4.47	22.63	4.78	0.000***	一<二 一<三 二<三
評価	8.40	2.72	9.26	2.76	10.56	2.60	0.000***	一<二 一<三 二<三

***p<.001

表 14 の平均値をみてみると、学習態度と評価について、ともに三年生が第一位を占めている。第二位は二年生、第三位は一年生である、また、Scheffe 多重分析の結果をみてみると、一年生は二年生と三年生との間に有意な差があった。つまり、一年生は二年生と三年生より低いことが明らかになった。

五、本研究の意義と今後の課題

このように、本研究では、これまでに焦点を当てられることが少なかった台湾の高校生を対象に、彼らの日本語学習の動機づけと学習態度を明らかにした。その結果：学習者の動機づけは「日本語学習への興味」、「交流志向」、「大衆文化への関心」、「実利志向」の 4 種類が掲げられること、また、「交流志向」と「大衆文化への関心」という統合的動機づけがより高いこと、さらに、性別、学級、高校の地域の要素の違いにより、その動機づけ、学習態度、考え方にも明らかな違いが見られることが分かった。このことから、学習者の違いにより、教師は異なる対応が求められることが示された。確かに台湾における選択科目としての高校の日本語教育では、学生の個々の興味や学習目的を満足させる授業はとうてい無理であろう。しかし、学習者の学習動機、学習目的をある程度教師側が考慮し、教材や指導法を工夫し、学習意欲を高めていく指導法を学生に提供することが必要であろう。また、日本語教育においては、学生に自発的に日本語を勉強させたり、積極的に学習活動に参加させたり、明確な学習目標を立てさせたりすることが重要であろう。

今回得た基礎データは、教授法や教授活動を改善するための情報、及び高校生の日本語学習者に指導をする時の情報として活用できるよう提供するものである。

今回の研究は質問紙調査による純粋な量的分析であった。動機づけは心理的な視点から見ると、学習者の属性、個人経験、社会状況などにより変容する可能性があるため、今後の動機づけ研究が向かうべき方向は統計的分析による量的な調査に加えて、学習プロセスにおける動機づけの質的研究を重ねることであろう。このために、今後はインタビュー調査や学習記録などの分析を行い、高校における日本語学習動機に関して量的研究では説明しきれなかった部分のさらなる解明への道を切り開いていきたい。

【謝辞】本調査にあたり、御協力頂きました日本語学習者、日本語教師の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用及び参考文献

Dornyei, Z.（200la）Teaching and Researching Motivation, Malaysia: Longman.

Dickinson, L.（l995）Autonomy and Motivation A Literature Review.Systern.23: 165-174

Ellis, R.（1997）Second Language Acquisition. Oxford University Press. 31-35.

Gardner, R. & Lambert, W.（1959）Motivational variables in second language acquisition. Canadian Journal of Psychology.13, 266-272.

Gardner, R. & Lambert, W.（1972）Attitudes and Motivation in second language learning, Rowley, Mass: Newbury House.:132

浅野志津子（2006）「学習動機と学習の楽しさが生涯学習参加への積極性と持続性に及ぼす影響：放送大学学生の高齢者を中心に」『発達心理学研究』第 17 号、230-240 頁。

荒井智子（2006）「台湾人日本語学習者の動機づけ一四年制大学応用日本語学科を例」『明海日本語』10・11 合併号、25-36 頁。

磐村文乃（2004）「韓国人女子大学生の日本語学習動機と対日観」『日本語教育国際研究大会予稿集発表 1 』、日本語教育学会、国際交流基金、国立国語研究所、179-184 頁。

郭俊海・大北葉子（2001）「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』第 110 号、日本語教育学会、130-139 頁。

教育部 http://www.edu.tw/high-school/index.aspx （2011）

呉致秀（2005）「日本語学習動機、学習態度及び学習効果についての研究」『東呉日本語教育学報』、第 26 号、東呉大学日本語文学系、1-33 頁。

財団法人交流協会（2010）『2009 年度台湾における日本語教育事情調査報告書』

成田高宏（1998）「日本語学習動機と成績との関係―タイの大学生の場合―」『世界の日本語教育』第 8 号、国際交流基金日本語センタ

一、1-11 頁。
縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査―ニュージーランドの場合―」『日本語教育』第86 号、日本語教育学会、162-172 頁。
速水敏彦（1998）『自己形成の心理―自律的動機づけ―』金子書房
藤原信行（2005）「台湾の日本語学習者は日本語学習をどのようにとらえているか―日本語学習の動機、到達目標、学習方法を中心に」『日本言語研究』第5号、76-90頁。
堀越和男（2006）「台湾の大学の夜間コースにおける日本語学習動機―日本語を専攻する学習者を対象に―」『國文学踏査』第 18 号、大正大学国文学会、280-292 頁。
楊家源（2004）「日本語学習者の学習動機付けに関する調査―台中技術学院の場合―」『応用外語学報』第 2 号、高雄第一科技大学外語学院、77-95 頁。
楊孟勲（2011）「台湾における日本語学習者の動機づけと継続ストラテジー 一日本語主専攻・非専攻学習者の比較―」『日本語教育』日本語教育学会、116-130 頁。
盧錦姬（2009）「第二外国語としての日本語学習の動機づけと学習態度」『靜宜語文論叢』第2号第2集、靜宜大学外語学院、117-15頁。
盧錦姬（2011）「日本語学習における学習動機、学習ストラテジーに関する調査研究―静宜大学日本語専攻学生の日本語学習を事例として―」『台大日本語文研究』第 21 号、111-139 頁。